

創世記 22 章 1-14 節

ローマの信徒への手紙 8 章 31-39 節

マルコによる福音書 8 章 31-38 節

大齋節第2主日となりました。本日は福音書を中心に学びたいと思います。本日の箇所は、イエス様が初めてご自分の受難と復活について弟子たちに語る場面です。「第一回受難予告」とも呼ばれます。物語の全体構成から見ますと、ちょうど真ん中に位置します。単に真ん中なのではなく、この場面を境にして、弟子たちはイエス様を誤解し始めるのです。

聖餐式聖書日課は31節からですが、お話は27節からつながっています。27節～30節は、ペトロの信仰告白の部分ですが、そこでイエス様は、人々が自分のことを何言っているか弟子たちに尋ねます。弟子たちは「**弟子たちは言った。『洗礼者ヨハネだと言っています。ほかに、エリヤだと言う人、ほかに、預言者の一人だと言う人もいます。』**」(マルコ 8:28)と答えます。これらは悪い噂ではないのですが、正しくありません。それゆえにイエス様は、弟子たちに尋ねると、ペトロが代表して答えます。答えは、「**あなたは、メシアです**」(マルコ 8:29)。ペトロはイエス様をメシア(キリスト)と答えていますから、正しいのですが、イエス様は、「**イエスは、ご自分のことを誰にも話さないようにと弟子たちを戒められた**」(マルコ 8:30)のでした。正しい答えなのになぜ戒められたのか、その理由31節以下、本日の箇所にあります。

31～33節、ここには、イエス様とペトロとの緊迫感あるやりとりがある場面です。イエス様は、自分の受難について「**人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちによって排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた**」(マルコ 8:31)ののですが、ペトロは、イエス様をわきへ呼んで、逆に師匠であるイエス様をいさめる(叱る)のです。すると今度はイエス様が、激しい口調で弟子たちを見ながら、つまりほかの弟子たちの目の前でペトロを叱るのです。「**サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている**」(マルコ 8:33)ですから、かなり厳しい批判です。

「神のことを思わず、人のことを思っている」、このやりとりを通して、正しい答えをしたはずのペトロの誤解が明確になります。メシアの意味が異なっていたのです。言い換えれば、神が何を目的にメシアを遣わしたのかを考えずに、メシアが人(自分たち・イスラエル)のためにどれほど有益な存在なのかを考えていたとのです。この誤解は簡単には解けませんでした。それゆえに、ここからイエス様に従いつつも、心が離れていく弟子たちの姿が描かれ始めるのです。

しかしながら、ペトロが間違うのも仕方がないかもしれません。ペトロの念頭には、メシアという事柄と、十字架で死ぬ存在という事柄が、概念として一致しなかったからです。彼にはおそらく奇跡を行う、癒しを行う、力に満ちたメシアというイメージしかなかったのです。言い替えれば、イエス様の力だけに注目していたのです。この間違いはつねに人に伴う間違いと言えます。つまり、善

なる力ならばよいではないか、人を助ける力ならばよいではないかと思ってしまうということです。しかし、神様の視点から言うとそうではないのです。人が善だと思ふ善、その善が本当に主なる神様にとっても善であるか、それは人間にはわからないからです。また、サタンも善であるようなことを主張する場合もあるからです。またサタンも人を魅了する力を持っているからです。超人間的な力を用いて善を実行する、物語としてはこの方がすっきりしますが、人間は、今起きている出来事が、本当に主なる神様の意志にあっている善であるかどうか、判断できないのです。

それでは主なる神様の求める善をどうやって知ることができるか、そのことについて、34節以下に、イエスは、弟子たちと群集を集めて大切な教えを語ります。「私の後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を負って、私に従いなさい」です。この言葉には3つのポイントがあります。

第1は、「自分を捨てる」ということです。直訳すれば自分自身を捨てることですが、この言葉には、後で語られるように、自分のからだ、あるいは命を捨てよという意味でもあります。しかし、第一に捨てるべきものは、33節のイエス様の言葉にある「人間の思い」です。自分の人間的思い、考え、更にはそれらからくる様々な欲望を捨てなさいとイエス様は語るのです。

第2は、「自分の十字架を背負う」ことです。この「十字架」という言葉は大切ですが誤解・誤用されることがあります。マルコ福音書の物語は、イエス様と全く同じ十字架を背負えと言っているわけではありません。主なる神様があなただけに与える自分の十字架です。時空を超えて今物語に触れている人たちに対して、自分の人生、自分の生き方の中で、主なる神様がその人だけに与える、その人だけの十字架、そのような十字架を自分で見いだしてそれを背負いなさいと語っているのです。その意味ではその人の人生の使命や目的と言い換えられるかもしれません。

第3は、「イエス様に従う」ということです。イエス様に従うとは、イエスと同じ道を歩むことを意味します。ゲツセマネのイエス様のように、イエス様であっても、その道を歩む上では苦悩がありました。その苦悩にする姿にあるのは、主なる神様に祈りつつ自分を飾らずに示し、主なる神様のみを信頼して、主なる神様に示された道を歩むことでした。その道を歩みなさいということです。

この3つのポイントをまとめるとき、マルコ福音書において、イエス様とは、信じる対象であると同時に、信仰者の模範にほかならないことが分かります。だからこそ、今の大齋の時があるとも言えます。大齋節は毎年来ます。またイエス様を模範とすべきは大齋の時だけではなく。しかし、復活を迎える準備の大齋の期間だからこそ、あらためて、イエス様が示した三つのポイントを今年もそれぞれ与えられた時と場所で確認したいと思います。そして、イエス様を誤解し、イエス様に従えず、イエス様を見捨てて離散してしまい、深い失望の中にあっても、復活されたイエス様に再度招かれて、再び力を得た弟子たちと同じように、この世界の各地であるいは自分の周りで、様々な困難な事柄や希望を失うような事柄があったとしても、復活イエス様の姿から、改めて恵みと力を得て歩みたいと思います。